

点字とともにある日々

「点訳本を読んだ方からいただく喜びの声が何よりも励みになります。また、これまでの点訳活動を通じて、さまざまな人と出会うことができたことも、私にとって大きな財産になっています」と約40年にわたる活動を振り返る志賀さん。

「失明する可能性がある」。37歳のときに病院で言われたひどい言葉をきっかけに『視覚障害者の会』の方などから点字を学び始めたという志賀さんは、これまで登別市点訳赤十字奉仕団の一員として、市広報紙や公共交通機関の時刻表などのほか、視覚に障がいのある方などから要望のあった資料などを点訳し、多くの人へ、生活と直結した情報を届けてきました。

時間と労力、根気が必要となる



▲手分けをして、点訳本の製作にあたる登別市点訳赤十字奉仕団のメンバー

点訳作業に志賀さんは、「視覚に障がいがあることで、受け取ることのできる情報は限られてしまいます。手渡した点訳本を嬉しそうに何度も読み返してくれるその姿は、私たちに活動の意義を改めて教えてくれますし、活動を続ける原動力になります」と、思いを話してくれました。

『明日』の仲間とともに

結成から33年を迎えた同奉仕団について、「多いときには36人いたメンバーも、現在は11人。小説などの点字図書も製作し、図書館などに寄贈したいという思いはありますが、手が回らないというのが実情です」と話す志賀さん。

「より多くの人が点字に興味をもっていたらできるよう、初心者講習会の開催も予定しています。点字は普段の生活で何気なく目にしているものも多く、身近なもの。気軽に参加してほしい」と思いをともにする仲間を探しながら、今日も一点一点に思いを込めます。

『登別市点訳赤十字奉仕団』の活動に興味のある方は、志賀さん（☎012210）に問い合わせください。



KIRARI

しが まさこ
志賀 征子さん(富士町)

皆さんは『点字』に触れたことはありませんか。縦3点、横2点の1マスに打たれた突起の組み合わせで表現する『点字』は、視覚に障がいのある人などにとって大切な情報源の一つです。登別市点訳赤十字奉仕団では、これまで『広報のぼりべつ』をはじめ、各種団体が発行する冊子などを点字に変換し、点訳本を製作してきました。今号では、同奉仕団委員長志賀征子さんに、長年続けてきた点訳活動に対する思いを伺いました。

読むことができる幸せを多くの人に届けたい



昭和20年、壮瞥町生まれ。74歳。

昭和45年、家族と共に登別市に転入。37歳の頃から、点字を学び始める。昭和61年、有志と共に登別市点訳赤十字奉仕団を結成し、平成14年から同奉仕団委員長に就任。学校などで出前講座も行っているほか、病気や事故などで視力が著しく低下した人などに、点字の読み書きを教えている。